

山陽道中

山陽道中

陽韻

破曉車窓藝備丘
不更瀬戸水湯湯
福山灰燼友生處
豈識驍營君國殤

破曉の車窓 藝備の丘
更らず 瀬戸の水 湯湯たるは
福山は灰燼せり 友の生れし處
あに識らんや 驍營の君 國殤せしとは

語注

破曉 夜明け 藝備 安藝と備後（廣島縣）

湯湯 水面に波の動くさま 灰燼 灰と燃えさし

驍營 近衛兵 國殤 國事に殉ず、戦死のこと

驛の一郭にありし復員事務所、無料乗車券の發行などの世話をやきぬ。食事も支給せしが、内地の味は雑穀混りの一合の飯に南瓜の味噌汁なりき。また、日本娘の米兵と併びて座し、兵喋れば甲高き聲にて笑ふも余らに目も向けざりき。敵の本土上陸を一日遅らせば國民の生命も一日伸びん。これぞ前線將士の任務なると強調されしが、こを目にして生命を賭けされし對象のあまりに空しかりしに白けざるを得ざりき。幕末期、米人を客とするを拒みて自害せしてふ遊女喜遊に見し心意氣の喪失を嘆きしが、敗殘の身なれば觀迎はされずとも、勞るくらゐはあるべしてふ甘き期待を抱きゐしこそをかしかれ。

夕刻、北支より復員せしらしき冬裝束の一團と共に東京行臨時列車に乗りぬ。廣島にて醒めしが人家の明り見えず、原子爆彈の破壊の凄じさを思知りぬ。唯、驛構内に草の芽生えしを見、放射能汚染にて百年は生えまじと聞きゐしにさにも非ざりしかと安堵せり。松山に歸る中隊長とは淡淡たる別離となりぬ。

明るさを増すにつれ戦災の痕の剝出されぬ。福山の驛舎の烏有に歸しをれば、ここ出身の大學同級生を思出でたり。入隊の前夜、西陣の料亭にて飲みし際に必ず生きて歸らんと誓ひ、やけくそ氣味にて「海ゆかば」を齊唱せしが。

軍隊嫌なれど甲種合格となりぬ。入隊せば入院か、然らずとも野戦にやられざるやう手を打ちたし。兵卒も辛きが、見習士官にて野戦に赴くは戦死の確率高し。大卒の乙幹は本部勤務となること多きが故、それを狙はんかと言ひをりぬ。復員せしてふ手紙を出せば、母親より涙混りの返書の來りぬ。廣島にて原爆にやられ、敗戦後に歸宅せるも九月になりて死せしとぞ。希望せし如く内地の司令部勤務となりしも、結局は命を無くすてふ運命なりしか。